

ガタガタッ!!・・・扉を開く音でハッと目が覚めた。開かれたドアや壁の隙間からは明るい朝日が差し込んでいる。節々の痛む身体を軋ませながら半身を起こすと、旅行者らしい若い青年達が呆れたような顔をして、ゴミが散乱した物置小屋の真ん中で眠っていた私達を覗きこんでいた。自分が何処にいるのか思い出すと、安堵の喜びが込み上げてきた。

ああ～!朝になったんだ!!良かった～!!

・・・昨夜、ヨロける足を引きずりながら暗い林を抜け、ボロ雑巾になったような気分で^{ルオロンニョウチャン}洛絨牛場までたどり着いた私とウィン^{ルオロンニョウチャン}は再び老女と子供達のいる牛番小屋を訪れた。

「友達を連れて来たよ～!」

チベット族の老女は私達の姿を見るなり慌てたように、すぐに離れの物置(のように見える)小屋に入るようにと言った。ええ～、ちょっとくらい休ませてくれたって良さそうなものじゃん・・・

老女達の小屋の中では囲炉裏が暖かそうな炎を上げていた。踏み固められて黒光りしている土間に置かれたダンボール箱のなかに眠っている赤ちゃん。小さな弟の面倒を見ながら目をキラキラさせて私達の様子を窺っている女の子。

先程日が落ちてから急速に空気がひんやりとしてきたのが服を通して感じられていた。ゴミの散乱している寒々とした物置小屋を思うと、暖かい囲炉裏を囲んで家族が団欒しているこちらの小屋にとどまりたかった。

「ねえ、私達もこちらの小屋と一緒に泊まらせてよー!!」

往生際も悪くダダをこねる私に老女はにべもなく首を振ると、いいからさっさとあっちの小屋に入っとくれ!!と犬を追い払うような仕草で私達を追い立てた。

「じゃあ、せめてお湯を頂戴よ」

「後で持って行ってやるから早く行っておくれ!!明日の朝になるまで絶対に小屋から出ちゃいけないよ!!」

老女の慌てぶりは訳あり風で、意地悪で言っているのではないようだった。

きっと管理人に見つかる事を怖れているのだ。洛絨牛場に着いてからの流れで薄々判ってきた事だが、ここは政府に管理されている土地で、所定の場所以外に旅行者を泊めるのは禁じられているのだろう。林の奥にある先程の男達の小屋とは違ってこちらは広々と開けた牧草地の端

に建っているのだ。私達が外をウロチョロしていれば目立つだろうし、湿原の対岸には政府に管理されている宿泊小屋があり、私が先程の管理人に出会ったのもその辺りだ。お金は欲しいが旅行者を自分の小屋に泊まらせているのが見つければ、宿主も面倒な事になるのに違いない。最初から老女が私達を泊まらせたがらなかったのはきっとそういうことなのだ。

私たちはしぶしぶ少し離れた場所に建っている物置(のような)小屋に向かった。ガッシリとした丸太や石で固められた老女達の堅牢な小屋とは大違いの、ブリキのトタンに囲われただけのバラックだ。しかしそれでも先程の男達の小屋であてがわれた廃屋よりは何倍もマシな気がしていた。

ジュースの空き缶やラーメンの包み紙、空き箱などのゴミの散乱した土間の奥には先人が滞在したなごりのように広いスノコが置いてあったので、これまた小屋の中に捨ててあった工事現場のビニールシートのような物をその上に敷いて荷物を降ろし、まだ少し不安そうな顔をしているウィンに声を掛けた。

「大丈夫だよ!もう心配ないから私に任せておいて!!」

背負ってきた大きなザックの中から、私は次々と得意気に荷物を取り出して、ヘッドランプと懐中電灯を低い天井の梁にぶら下げた。

携帯ナイフで梨をむき半分に切って二人で分けると、程なくして老女が運んできてくれた魔法瓶のお湯を日本から持ってきたアルファ米のパックに注ぎ込む。

お湯を注いで20分程待つだけで、乾燥した米に水分がしみこんで炊きたてのような暖かいご飯が食べられるという優れたものだ。私が持っていたのはちゃんと味のついた具も入っている炊き込みご飯で、山で食べるインスタントご飯としては味の方も十分にいける代物だ。一口食べたウィンは顔をほころばせ「美味しい」と呟いた。

考えてみれば今日は早朝に麺を一杯食べたきり、殆ど何も食べずに一日中歩き回っていたのだ。二人でかわりばんこにスプーンを使ってアルファ米の炊き込みご飯を食べると、マグカップにザックから取り出したお茶葉を振り入れてお湯を注ぎこみ、茶葉が口に入らないように上澄みだけ啜ってお茶を飲んだ。ウィンがザックの中からチョコレート^{チョコレート}のクッキーを取り出して勧めてくれる。

疲れきってさほど食欲も無かった私達はすぐにお腹が一杯になってしまった。人心地がつくとウィンはちょっと尊敬のこもった眼差しで私を見つめて言った。

「元子、私あなたみたいに強い女の人に会ったことないわ」

思わず笑ってしまった私は「そうよ。私はとっても強い
のよ」と腕を上げて力瘤を作ってみせた。

ほの暗い懐中電灯の明かりの下で暫く喋っているうち
にすぐに眠くなってしまった。ザックからダウンのシュラ
フを取り出すと、持ってる洋服を全部身に着けてからもぐ
って眠るようにとウィンに渡し、自分はこんな事もあろう
かと持ってきていたダウンのパンツに本来は街着だった
お古のダウンジャケットを着込むと、シュラフカバーの中
にもぐりこんだ。夜は冷えるだろうがこれでなんとか過ご
せる筈だ。

「私ね、こんな場所に泊るのは初めてだよ。こんな風に
寝るのも初めて・・・」ウィンが言った。

そうだよね……。最初にこの場所を見た時ウィンが激
しく拒否反応を示した気持ちが今になって解るような気
がした。彼女は山小屋などに泊まった事も無い普通の女の
子だったのだ。

私の背負っていた荷物の内容も知らされていないウィン
にしてみれば、十分な食料も布団も無い状態で、ほぼ野宿
といえるような場所にどうやって泊まれるのか想像もつか
なかったのだろう。彼女には酷い体験だったかもしれない
が、後で思い返せばきっと心に残る旅の思い出になるにち
がいない。ウィンには悪いが私にしてみれば概ね希望して
いた通りの形で洛絨牛場に泊まる事ができた訳だ。

もしも洛絨牛場の宿泊施設が開いていたなら、皆に笑
われながらここまで重い荷物を背負って歩いてきた甲斐
が無かったというものだ。何の苦労もなく普通の宿に泊ま
るより断然こっちの方が面白い。今日も色々あったけど、
終わり良ければ全て良し。あれほど林の中を無駄に駆けず
り回ったことさえ、今となっては笑い話になっている。私
はすっかり満足していた。

横になり今日の出来事を思い返しているうちに、朝から
歩き回った疲れもあってすぐにウトウトと眠ってしまった
らしい。そのまま朝までぐっすり眠っていたかったが、
数時間程たったところで再び眠りの世界から呼び戻され
てしまった。寒いのだ。夜が更けるにつれてシンシンとし
た寒さが小屋の中にまで忍び込んできていた。暫くはその
ままやり過ごして再び眠りにつこうと努力していたが、そ
うしている間にもますます身体が冷えてくる。寒さに耐え
ているうちにすっかり目が覚めてしまった。枕元において
いた時計をみるとまだ11時過ぎだ。

ああ～夜はまだまだ長いじゃないか～。絶望的な気持ち
になった。せっかく今日一日の疲れをとるために泥のよう
に眠りたかったのに。隣を見るとウィンは静かに眠ってい
るようだ。あっちのシュラフの方が暖かいのかなあ。

安物ダウンジャケットの中綿はポリエステルだ。本物の
ダウンが詰まったシュラフをウィンに貸している事がちょ
っと恨めしい。口から吐く息が白くなっているのが見えた。

ザックの中にホカロンがあった事を思い出して取り出
し何箇所か貼り付けてみたが、場所が悪かったのかさほど
の効果は得られずに、それから明け方近くまでウトウトし
ては寒さに目を覚ますことを繰り返しながら、ひたすら早
く朝が来る事を願って過ごした。いくら8月とはいえ、や
はり高度4000メートルでのキャンプは楽じゃない。
最後に時計を見たのは既に4時を回っていただろうか、そ
れからようやく私は本格的な睡眠に入っていたようだった。

突然響いたドアの音に起こされた私とウィンが寝ぼけ
顔で起き上がると、ドアの隙間から顔を出していた青年達
が呆れたように言った。

「君達、昨夜はここに泊まったの～!？」

改めて彼らの顔を見直してみれば、昨日沖古寺で出会っ
た学生達だ。

「なんだ君たちかあ、おはよう～!!」

時計を見ると9時過ぎだった。外に出て行くとサンサン
と朝日が輝く中、男女合わせて7人でやってきたという学
生達が思い思いに小屋の周りに散らばっている。中国語で
は『牛奶海』という名で呼ばれている宝石の湖を見に行く
ために、今朝早く沖古寺を出てここまで歩いてやって来た
のだそうだ。

思わず全身の力が抜けそうになった。今日宝石の湖を
目指そうとしていたのは私達も一緒だ。そのために少しで
も近くまで進んでおきたい気持ちもあって、昨日無理して
洛絨牛場目指して歩いて来たというのに、結局スタートは
一緒じゃないか!!

昨日の彼らは沖古寺で早めに宿に入ると快適な寝床で
ゆっくり休み、今日の鋭気を養って朝早く起きると、昨日
の私達が重い荷物を背負い何時間もかけてダラダラと登
って来た山道を、ピクニック使用の軽装でスタスタと2、
3時間程度で登ってきたという訳だ。どちらが賢い行動か
は考えるまでも無いが、あえてバカバカしい苦労をわざわざ
好んでやっている自分たちの方がきっと面白い。面白い
に決まってる!!やはり私の旅はこれで良いのだ。

湿原を流れる小川の水で顔を洗った。老女の小屋でお
湯をもらい、熱湯を入れるだけで食べられるインスタント
ラーメンを作ってウィンと食べると、昨日広げていた荷物
をまとめ、宿代の20元を支払った。昨日10元からいき
なり30元に跳ね上がった宿代は後からウィンに交渉させ
て、なんとか真ん中の20元にまとめてもらったのだ。

あんな小屋では10元でも人の足元をみてのポツタクリ
だと言えないこともないが、先方は嫌だと言っているところ
に無理やり泊めてくれと押しかけたのは私達だ。管理人
に見つかれば何らかのペナルティを受けなければならない
リスクも含めた価格だと思うことにした。ハイキング用
の小さなザックだけを背負い、大きなザックは戻ってくる
まで小屋で預かってもらうように頼むと老女は快く承諾
してくれた。

「ところで、ここから牛奶海までの道はわかるかい？」

私達と一緒に老女の小屋の中に腰掛けて、話していた
学生の一人が言った。

「あたしがガイドしようか？ 30元だよ！！」

すかさず、利発そうな小屋の少女が声を上げた。年齢を
尋ねればまだ10歳とはいえ、弟の世話や家事など見ているとクルクルと良く働いている。もうお金を稼ぐ事もできる一人前の家族の担い手なのだ。

学生の一人が私の方を向いて言った。

「ガイドがいた方が良くないかなあ？」

「そんなものは必要ないわ！道なら私に任せて頂戴！！」

私は即座に答えると、女の子に「ごめんね、道は知っているのよ」と小声で謝った。

さあ、出発の準備が整った。

「出発するぞお〜！！」

リーダー格らしい青年の呼び声に、それまで辺りに散らばっておもいおもいに休憩を取っていた男女達が集まってきた。

「さあ、ここからは君がリーダーだ。宜しく頼むぜ」

青年が私に向かって言った。

いよいよこれから幻の湖に向かって出発するのだ。思いがけなく旅の仲間も増えて、楽しい道中になりそうじゃないか。

「オッケー！！みんな私に着いてきて！！レッツ・ゴー！！」

絶好調に気分の盛り上がってきた私は、叫び声を上げると青い空に向かってこぶしを振り上げた。

